あけぼの　2011年6月号　平成23年6月1日号　第56巻6号（毎月1回1日発行）

300円

2011 6 あけぼの

祈り—東日本大震災・哀悼そして「生きる力」の希求

円顔行脚・藤原新也のブログから藤原新也
日常を希求する佐伯一麦　　思いを寄せ続けて…私は歌う李広宏
3月11日以降、私たちにできること長 有紀枝

連載
"ことばの杜"への小道 PartⅡ／社会に貢献できる自立した人間を育てる中学校　お相手・代田昭久氏／山根基世
ミステリアスな日々／この春の花木崎さと子
活憲とヒューマンライツ（人権）／原発反対の祝島から福島を見る伊藤千尋
光と風のおくりもの／「祈り」三浦暁子
キリストの足跡／キリストとともに、キリストのうちに百瀬文晃

山根基世

やまね・もとよ

ＮＨＫ退職後たちあげた、有限責任事業組合「ことばの杜」代表。著書『ことばで「私」を育てる』『「ことば」ほどおいしいものはない』ほか。

代田昭久

しろた・あきひさ

大学卒業後、リクルート入社、02年退社その後、（株）トップアスリート設立、代表取締役就任。08年３月退任。同年４月和田中学校校長就任。

"ことばの杜"への小道 Part Ⅱ

第６回

社会に貢献できる自立した人間を育てる中学校

「新しい時代」の中学生教育に取り組みたい

代田　「よのなか科ＮＥＸＴ」の授業でこのたびの震災にかかわる授業をして、生徒たちに震災に関する作文を書いてもらいました。

山根　すばやい動きですね。早い。さすが和田中学ですね。

代田　一時的な募金活動は「やった感」はありますが、復興していくには十年、二十年、もしくは五十年、六十年かかるでしょうから、長期的に取り組んでいく力を蓄えさせたいですね。今年度最初の各教科の授業では、それぞれに震災の授業をしてもらいました。四月二十三日には全校授業を行い、生徒代表の作文発表と、ＡＵＮ―Ｊという和楽器を使う演奏家たちとの吹奏学部のコラボレーションで「世界で一つだけの花」を演奏して被災地に思いを届けようという活動をします。今、詩を募集していて震災のオリジナル曲を作ろうと思っています。和田中三年生は常にこの歌を忘れないように、オリジナル曲を秋の合唱コンクールで歌うようにしています。

山根　各教科、それぞれの先生が震災について語ると、どんな授業ですか？

代田　たとえば理科では原子力発電所での発電する仕組みや、放射線について検査器をもってベクレル、シーベルトの勉強を、また社会では世界

のエネルギーと題して各国の発電方法の違いなどについて勉強しました。

山根　先生の入学式の挨拶は、震災を踏まえて今こそ君たちは勉強するべきとき、日本再建に向けて、と説得力がありました。いつも的確で短い中にメッセージのこもる挨拶ですね。

代田　生徒の朝礼などに使う言葉は大事にしようと心掛けています。生徒にわかりやすい言葉を使うようにしています。

山根　校長職は二〇〇八年の四月からで、それまではトップアスリートという会社の社長をしてらして……前校長の藤原先生からの誘いで、最終的に引き受けられるとき、どのように自分の中での納得があったのですか？　中学校の校長になろうということに。

代田　藤原先生とはリクルート時代の先輩後輩ですが、社内では多少面識があり、コミュニケーションがあった、という程度です。一九九五、六、七年くらいは就職氷河期で大学生の就職環境が非常に悪く、私は社内で起案して「三日間」の就職塾「リクルートビジネススクール」を始めました。しかし、塾に通ってくる学生に、社会に貢献する、働くという意識を、三日間では醸成できなかったと思います。講師として著名な先生方に来ていただいて、先生方は講義のなかで、君たち、なんで働くかを考えてみよう、自分の力を生かそう、と、語られるのですが、目の前に迫った就職というハードルを乗り越えようとしている大学生には、その意図は伝わらず、彼らへの教育効果は薄いと実感しました。それで、三年で塾を閉鎖し、しばらくして会社を辞め独立しました。作家の村上龍さんが、『十三歳のハローワーク』という著書を出版し、その中で五百十四の職業を解説しているのですが、その「十三歳のハローワーク」の公式ウェブサイトを村上さんと立ち上げました。サイトを立ち上げ、運営をしながら中学生からの質問や悩み相談を受けて、中学生は大変だな、と思っていましたし、少なくとも時代は変わりました。大学まで知識集約型の勉強をして知識を持っていれば、企業に入り研修してもらって終身雇用、という時代の生き方と、企業は研修しない、会社もつぶれる中でどういう生き方をしないといけないか。十三歳から少しずつ考えないといけないのに、教育は時代の変化に対して対応できてないと考えるようになりました。

山根　新しい時代の中学生教育をやってみようと。実際に入ってみられていかがでしたか。

代田　おもしろいです。

山根　先生のメッセージを読むと、子どもたちにものすごく大きな期待を寄せて、日本の希望としてメッセージを送ろうとしてらっしゃるのがわかる気がします。毎日生き生きとお仕事なさっているんだろうと。（笑い）

代田　（笑い）生き生きかどうかは別ですが、楽しいです。その楽しさは生徒の成長を見ることにつきます。ほかの職業では味わえないですから。

山根　具体的にはどういうことがあります？

代田　こういうむずかしい問題に対して、このような発言ができるようになったり、とか、感想文をここまで書けるようになった、とか、という成長を見たときですね。今は、全学年で授業していて、一年生と二年生は月一回で、三年生は隔週のふたコマずつ行っています。

山根　それはなんの授業というのですか？

代田　総合的な学習の時間で「よのなか科NEXT」という授業です。

山根　どういうテーマを取り扱うのですか？

代田　世の中の今の課題や、問題を取り入れた授業を行います。基本的には答えのない世の中の問題を扱った授業です。たとえば、今まさに震災後をどう生きるか。

山根　リアルな現実の生活と密着した学問ということですね。

代田　昨年はいのちの教育として、臓器の提供の問題、代理出産、赤ちゃんポスト、出生前検診などの問題を扱いました。あとは、社会のルールをちゃんと教えていたいですね。

山根　すごいテーマですね。先生ご自身の人生観が問われますよね。

代田　私の教育観で行っていますので動じません。

山根　学校の特徴としてＰＴＡ組織を抜けて「保護者の会」を作ってらっしゃいますが、先生のお考えですか？

代田　藤原前校長が提案して地域本部の中に入れるような組織構成をしたのが任期最後の三月でした。そこで再編して、総会の前にＰＴＡを脱退したのですが、現実は、私が校長になって地域本部と並列の学校を支える保護者の会を作りました。

山根　全国のＰＴＡを敵にまわすみたいな報道で。（笑い）

代田　今、そもそも保護者の会を組織していない学校もある中で、うちは保護者のみなさんに、より学校を支えていただきたいという思いからです。ですから先生との組織ではなく、保護者のみなさんの組織として、むしろ資源を集中させてください、というメッセージを送りました。たとえばＰＴＡ会長になると場合によっては学校外のことで年間百日くらい費やすことになります。今は和田中の地域本部の活動と保護者の会の両輪で調和して進んでいます。

山根　全面的に学校を支える、校長を支える、ということですね。

代田　先生との組織ではなくて、明確に学校を支えてもらう組織です。

山根　モンスター・ペアレンツが問題になったりしていますが、そのような親はいないんですか。

代田　モンスター・ペアレンツの定義は、私はわかりませんが、理不尽な要求をする保護者はたしかにいます。学校をある種のサービス業のようにとらえていて、公教育でお互い育てていく、という昔の意識は希薄になっているとは思います。ただ世の中で言われているほど、保護者の要求が理不尽だとは思いません。

山根　お互いの信頼感があるから少々の理不尽な要求があったとしても。

代田　大丈夫ですね。会社を経営していれば、無茶な消費者もお客もいます。それを転じてその感覚でみると、保護者の感覚も納得できるのです。

学校の教育ビジョンを示し、常にメッセージを発し、誠実に教育活動を実践していれば、多少何かがあっても、学校との信頼関係はゆるぎないと思います。そのマジョリティを作っていくのが大事ですね。

めざす「自立貢献」とは

山根　学校がめざしているのは「自立貢献」。昔から貫かれているものですか？

代田　藤原先生からですね。

山根　具体的に、こんな子どもを育てて行こう、というビジョンは？

代田　短期的な視野で、いい高校に入った、ということではなくて、長期的な視野に立って、社会に出るまでのびしろがある子どもを育てていきたいと思います。なぜ学ぶのか、なぜ学ばなければならないのか。社会に出たときに、まずは自立できる。具体的には自分自身でお金を稼ぎ、生活の糧を得ることができる。

山根　経済的な自立は大事ですよね。でもこういうことを口にする校長さんは、あんまりいなかったですよね、今まで。

代田　確かにそうかもしれません。

山根　私は団塊世代ですが、女性として生きるとき、経済的自立をなにより目指していましたね。精神の自由を獲得するには経済的自立は必要ですね。

代田　社会のなかで貢献しないと自立できない、これは裏表ですね。経済的自立は必要。だからといってお金をもうければいい、というものでもなく、社会の中でどう生きて、生かされていくか。

常に他人との接点を見いだせるような感覚、これは中学校の生活でできるのです。人に貢献するということ。すごく小さなところでいうと、みんなが集まったら静かにする、これは貢献なんだよ、と。時間どおりに集まることも。基本的なことは人のことを考える、思いやる、やさしさやいたわりの心を持つ、これらすべて貢献です。これは学校現場の先生たちのほうが咀嚼してくれている場面が多いかなあと思います。

山根　先生たちとの関係はどうですか。むずかしくないですか。落下傘式におりてきて。

代田　一年目はいろいろありました。私は男性でいうと下から二番目の若さ、四十三歳で校長に就任したので。逆の立場で考えると、教育現場を知らないトップだと不安になるのは当然な感覚だと思います。だから当然、差異、摩擦があって、それはよかったのかなあ、と。

山根　摩擦をどう解消されたんですか。

代田　コミュニケーションを取り続けました。方向性は同じですよね。子どもを育てる仕事のプロフェッショナルな教員と校長と、みんなが自立貢献する子どもたちに向かいさえすればいいのですから。ぼくに文句言ってもらっていいですよ、その代わり職務としては、お互いに自立貢献する子どもたちを育てていきましょうね、とシンプルに話してきたから、分かり合えるようになったかなと思います。

山根　目指すものを明確にしめすことができたら、人もついてくるのでしょうね。

　和田中みたいな学校が全国津々浦々に広がる方法ってないんですかね。

代田　私ももちろん広がる方法を考えていますが、なかなか広がらないですね。ただそれを実現するのは学校の現場以外の人にお願いしたいと思います。マスコミの人にはよく言いますが、私の仕事は和田中生に向かい合う仕事で、世の中にいいものを広めていくのはあなたたちの仕事ですよ、と。

山根　「和田中」が全国津々浦々に機能していくような仕組みができれば……まずは人材を育てる、先生のようなタイプのリーダーをもっと育てていくことが必要なのかしら。

代田　私は民間人校長が優れているとはまったく思わないです。複線的に校長に優秀な人材が入るような仕組みを作らないといけないですよね。今、校長になるには一本筋のキャリアを三十年間続けないとなれない。横転もなければ飛び級もなし。今や社長でさえ外国人だったり、複線的な人事なのに、長い年月かけて単線のキャリアしか歩めない、というのが校長職を萎縮させているし、矮小化させていると思います。

山根　学校現場の仕組みそのものですね

代田　ですから民間人校長を百人、二百人採用してもあまり変わらないと思います。

山根　教育は一番クリエイティブな仕事だろうと思います。子どもたちが育っていくのをみるのは、どんなにかすばらしい体験だろうな、と。

代田　卒業式のときはやっぱり泣けるわけです。ああこんなふうに生徒が巣立っていって、毎日の授業、ときどきの行事、運動会や音楽会やもろもろの教育活動は、卒業式の最後の瞬間の、生徒を見送るためにやっている。その感覚がようやくわかってきました。最後のゴール地点が同じなんです。和田中で三年間過ごせてよかった、と生徒に感動させたい。そしてこれから先もがんばっていきたい、そう思わせたい。頭のツンツンしているやつも、号泣して卒業証書をもらって壇から下りていく。そのために愛情と叱ることをやっていくんだ、と。

山根　これから新しい日本を作っていかないといけないですね。中学生たちと同じように私も言葉で励まされました。